

OSSのERP「iDempiere」はどこまで使えるか —アプリケーション開発基盤としての魅力—

オープンソースソフトウェア（OSS）は、今や業務アプリケーションの領域にも進出し、経営を支える重要システムであるERP（統合基幹業務システム）の製品まで現れた。本稿では、OSSのERPパッケージ「iDempiere」（アイデンピエレ）を紹介し、「無料で使えるOSS」はERPではどの程度“使える”ものなのか、事例を交えて解説する。

充実した機能を持つ「iDempiere」

「iDempiere」は標準機能として販売管理、在庫管理、購買管理、会計管理（財務会計、管理会計）、生産管理、顧客管理などの業務機能を備えており、人事給与管理もプラグインとして提供されている。またグローバル対応も充実しており、多言語対応、多通貨対応はもちろん、複数の会計基準を処理できるように複数の会計帳簿を作成できるようになっている。SaaS（Software as a Service）などのWebアプリケーション（ネットワークを通じて利用するソフトウェア）として利用することが可能で、クラウド基盤での運用も問題ない。権限管理やログ管理などセキュリティ機能も備わっている。

これらの機能は「iDempiere」の機能の一部であり、「iDempiere」はOSSでありながらERPとして必要とされる要素をひととおり備えている。誌面の制約から機能の詳細な説明はできないが、業務機能という面で評価するならば、販売管理、購買管理、在庫管理、会計管理については機能的にも充実しており、導入実績も多いことから“使える”レベルに達していると言ってよいであろう。

足りない部分もある「iDempiere」

一方で、まだまだ“使えない”機能もある。例えば生産管理について言えば、会計面に焦点を当てた機能であり、実際に使用する際には多くの追加開発が必要であろう。また人事給与管理については、日本企業の慣習にどれほど適合できるか検証できていない。

このように、「iDempiere」はERPとして必要とされる要素が備わっている一方で、足りない機能もある。大手の商用ERPパッケージと「iDempiere」を標準で提供している業務機能で比較すれば、大手商用ERPパッケージに軍配が上がるだろう。しかし、だからといって「iDempiere」は“使えない”と切り捨ててしまうのは早計である。「iDempiere」の魅力は、標準で提供している業務機能とは別のところにあるからである。

開発基盤としての「iDempiere」

筆者は、「iDempiere」の魅力は業務アプリケーションの開発基盤と言うべきアーキテクチャーにあると考えている。なぜそこに「iDempiere」の魅力があるのかを説明する前に、「iDempiere」と商用ERPパッケージ

野村総合研究所
情報技術本部
オープンソースソリューション推進室
上級テクニカルエンジニア
保田和彦（やすだかずひこ）
専門は方式設計、OSS全般に関するコンサル
ティング



のカスタマイズ手法の違いについて触れておきたい。

(1) カスタマイズの方法

まず、業務アプリケーションのカスタマイズの方法には次の3つがある。

- ① コンフィグレーション設定（パラメーターの設定だけで行えるカスタマイズ）
- ② アドオン開発（標準機能のソースコードを修正することなく、追加開発することによって機能を拡張するカスタマイズ）
- ③ モディフィケーション（標準機能のソースコードを修正して行うカスタマイズ）

商用ERPパッケージを使用する場合は、コンフィグレーション設定とアドオン開発によるカスタマイズが主で、モディフィケーションはパッケージベンダーのサポート対象外とされるため通常は行われまいであろう。

「iDempiere」では、コンフィグレーション設定、アドオン開発、モディフィケーションのいずれのカスタマイズも可能である。ただし、モディフィケーションによるカスタマイズを行う場合は、保守（保障）やバージョンアップへの対応が問題になるだろう。それについては後で述べることにして、以下では業務アプリケーション開発基盤としての「iDempiere」の魅力について説明したい。

(2) 「iDempiere」におけるカスタマイズ

まず、コンフィグレーション設定によるカスタマイズに関しては「iDempiere」も商用ERPパッケージと同様である。

コンフィグレーション設定によるカスタマイズの中心に、アプリケーション辞書（Application Dictionary）と呼ばれる機能があり、ユーザーが操作する入力画面やレポート類などは、アプリケーション辞書のパラメーター設定だけで、きめ細かく柔軟なカスタマイズが可能である。

「iDempiere」の大きな特徴がアドオン開発である。「iDempiere」は業務アプリケーションでありながら、ソフトウェア統合開発環境の「Eclipse 3.0」以降でも採用されているOSGiの仕様を取り込んだアーキテクチャーとなっている。OSGiは、プラグイン（Javaモジュール）の動的追加や実行を管理するためのフレームワークである。これは他のERP製品にはない「iDempiere」の特徴である。実は、もともと「iDempiere」は前身の「ADempiere」にOSGiのアドオンアーキテクチャーを実装したものなのである。

(3) 開発基盤としての活用

OSGiのアーキテクチャーにより、開発者はユーザー企業特有の業務処理をアドオンとして追加開発することができる。開発は比較的容易で、開発生産性が高く、なおかつ既存の機能に対する品質低下を最小限に抑えることができる。

標準機能として実装されている業務機能も、すべてアプリケーション辞書の定義をベースに、業務処理に関する部分をアドオンモジュールとして開発したものである。このた

め、標準機能であっても、アドオンの単位でモディフィケーションを行うことにより、品質低下を抑えたカスタマイズが可能なのである。すなわち、「iDempiere」は業務アプリケーションの開発基盤として“使える”と言ってよい。従って、足りない機能があること自体は、「iDempiere」にとって大きな問題ではない。

少し先の話であるが、「iDempiere-App Store」なるWebサイトが開設されるといわれている。そこでは、世界中の開発者によって「iDempiere」のプラグインとして開発された無料・有料の業務アプリケーションが公開され、ユーザーは自社の業務にマッチした機能をダウンロードし、気軽に試し、導入することができるようになると思われる。現時点ではプラグインの数はそろっていない。しかし、このようなプラグインによる機能拡張は「iDempiere」の可能性を大きく広げることには間違いない。

「iDempiere」活用のポイント

「iDempiere」が標準で備えている業務機能や、「iDempiere」の魅力について解説してきたが、ここでは現段階で「iDempiere」の導入効果が期待できる領域や活用方法について考えたい。

(1) 効果が期待できる業態

上記のように、「iDempiere」は現段階ではまだ足りない機能があり、プラグインも充

実していない。では「iDempiere」の導入効果はどのよう点で期待できるのだろうか。

導入効果が期待できるということは、低コストで導入できるということであり、なおかつ追加開発が少なく済むということであろう。卸売業やサービス業などは、販売管理、在庫管理、購買管理、会計管理が中心となり、「iDempiere」の中でも機能が充実している部分であることから、一般にカスタマイズ工数が抑えられ、導入効果が高いと言える。小売業についても、POS（販売時点情報管理）との連携などに気を配る必要はあるものの、導入効果が期待できるであろう。

(2) スモールスタート

一方で、業態を問わず適用手法というアプローチで検討してみると、活用できる部分だけを利用するという手法が浮かび上がる。実際に、初めは“つまみ食い”的にスモールスタートし、少しずつ利用範囲を広げていく導入事例も多い。商用ERPパッケージでは高額なライセンス費を支払う必要があるために難しいが、「iDempiere」であれば、会計などは後からでも導入できるように考えられているため、スモールスタートが容易である。

(3) “2層ERP”としての活用

現在、最も注目される「iDempiere」の活用方法はグローバルな領域での活用である。日本では大手企業のERPパッケージの導入はほぼ終わったといわれている。しかし、大手企業でも海外の子会社や販売会社に

まで高額なERPパッケージを導入できないでいるケースがある。このようなケースでは、「iDempiere」を活用して海外拠点用のテンプレート（ひな型）を作成し、地域ごとに展開していくことが有効である。導入テンプレートを作成しておくことにより、業務が標準化され、スピーディーな海外展開が可能になる。クラウドサービスを活用すれば、ハードウェアの初期投資をゼロに抑えられるといった効果も期待できる。

このように、日本の本社の高価なERPと海外拠点の低価格のERPを連動させるERPの使い方を“2層ERP”と呼び、低価格帯のERPの販売を広げようという動きが見られる。「iDempiere」のグローバル対応は充実しているため、この“2層ERP”と呼ばれる活用領域は注目すべきであろう。

「iDempiere」の“カスタマイズ力”

「iDempiere」の導入効果を高めるためには、これまで述べてきたように、その“カスタマイズ力”を最大限に利用することが最も有効であろう。しかしながら、カスタマイズは改修箇所の特定制や品質面でのリスクを負う。商用ERPパッケージでユーザーがモディフィケーションを許されないのは、製品ベンダーに全責任を負うことを約束してもらうための代償と言える。

一方で「iDempiere」はすでに述べたように業務アプリケーションの開発基盤という

性格を持っている。すなわち、「iDempiere」が採用するOSGiのアーキテクチャーは、カスタマイズ部分のプラグインモジュールをアドオンとして分離することを可能にしている。最近のWebアプリケーションであれば、多かれ少なかれOSSのフレームワークやライブラリーを使用しているであろう。それらと「iDempiere」は同じである。独自アドオンモジュールをアプリケーションと同じ観点で保守し、コア機能には手を入れないで利用できるわけである。

野村総合研究所（NRI）が提供するOSSの統合業務システム「OpenStandia/Biz」では、このようなアドオン開発やコア機能のモディフィケーションを実施し、それを顧客企業のオリジナルのバージョンとして、有償での長期サポートを可能にしている。こうした有償のサポートサービスでは、ぜい弱性やバグなどが発見された場合に、サービスベンダーがパッチを作成して適用することも可能である。先に、モディフィケーションによるカスタマイズを行う場合に、保守（保障）やバージョンアップへの対応が問題になることを述べたが、有償のサポートサービスはそれらの問題を回避するために有効である。

OSSのERPアプリケーションは、まだ導入事例がそれほど多くないことから評価が定まっていないが、さまざまな可能性を持ち、これから発展が期待される分野である。本稿が導入検討のきっかけになれば幸いである。■